

第Ⅱ部

「アラブの春」に見る軍・宗教・メディア——地域間比較から

特集Ⅰ 中東から変わる世界

「特集にあたって」

「アラブの春」のわかりにくさを解きほぐす

西 芳実

「アラブの春」に向けられた関心には、大きく分けて、政変のわかりにくさをどう捉えるか、他の地域に波及するかどうか、歴史的意義をどう考えるかの三つがあった。第Ⅱ部では、中東政変のわかりにくさと関連して、以下の三つのテーマを扱う。一つは、「顔の見えない革命」によって生じた政変をどのように理解し、どのように展望するかという問い

である。二つ目は、宗教の動向を政治への影響と関連してどのように理解するかである。三つ目は、フェイスブックに代表される新しいメディアの役割である。

それぞれの論考は「中東政変のわかりにくさ」に対する地域研究者の対応である。地域に内在的な視点だけでなく、同じような課題をもつ世界の他の地

域の経験やそこで得られた知見と照らし合わせることで新しい理解が得られる。比較の視点と中からの視点をあわせることで、新しい課題に取り組む際にどのようなアプローチが可能であることを示すものである。

対話と調整を探るアプローチ

政治変動が生じているときは、多様なアクターが同時に動き、新しい事態が次々に起こる。情報が断片的になり、全体像を捉えにくくなる。そのような事態を捉えるには、まず、他地域の同様の経験をもとに組み立てられた理論を参照する方法がある。

群衆が街頭に繰り出すことによって生じる政治変動は、中東政変に限定される事柄ではない。中東政変は、政変の主役が「にわか動員」された民衆で、それを導く組織やリーダーが不在であり、また、宗教色やイデオロギー色が薄いことから「顔の見えない革命」であり、これまで中東で観察されなかった。しかし、世界は多くの地域でこのような政変を経験しており、その分析のための理論的枠組が整えられてきた。

比較政治学の立場からインドネシア地域研究を行う増原綾子は、一九九八年政変をめぐるインドネシアの経験を踏まえて、政権側と民主化勢力、あるいは旧支配勢力と新支配勢力の対立を強調するより、むしろ対立しているように見える勢力間の譲歩や協調に注目する視点が新体制の安定を展望する上で重要であるとの立場に立ち、軍や与党といった体制側と反体制側とのあいだの交渉の場の有無や、正義の回復と制度形成が必ずしも一致しない状況下でどちらを優先させるかという着眼点を提示している。

では、エジプトでは対立する勢力間の協調や情報はどこで誰によつてはかられるのか。エジプト地域研究を専門とする鈴木恵美は、政変における軍の役割に注目する。エジプトの軍は、新体制へ移行するまでの非常時における仲介者を自認して行動しており、エジプトの民主化の成否は軍最高評議会が国民からの信頼や軍の統合を失わずに新体制の発足までその役割を維持できるにかかっているとの展望を示している。対立点をみようとするとその展望や調整の側面をみようとするとするアプローチがとられている。

体制内宗教勢力を捉えるアプローチ

政変や社会変革を観察する際に、しばしば宗教の果たす役割が注目されてきた。この前提には、宗教を基盤とする組織が反体制勢力の受け皿となるという理解がある。また、イスラム教徒が多数派を占める社会に対しては、イスラム教が政治と結びつくことによって欧米的な価値観と対立する国家がつけられるのではないかとの懸念や期待が向けられてきた。誤解をおそれずにいえば、イスラム教を政治的な不安定因子とみなす傾向は根強くあり、とくに九・一一以降に顕著である。しかし、「アラブの春」が示したのは、イスラム勢力が体制転換を直接の目標に掲げずに、国民に対する社会サービスの提供者となり、そのようなイスラム勢力が社会においてプレゼンスを増している状況である。それゆえに、イスラム教を基盤とする組織の拡大や、文化・社会におけるイスラム的要素の増加は必ずしも政治のイスラム化やイスラムの政治化を意味しない。

エジプトのムスリム同胞団の研究を行ってきた横田貴之によれば、エジプトのムスリム同胞団は活動

の拠点を政治から社会活動に移し、イスラム法の全面施行などのイスラム的な主張をしないことで活動領域を拡大し、結果としてエジプトにおける「反政府」勢力の分裂を避けてきた。政変後も、エジプトの急進的なイスラム化に対するエジプト内外の懸念を意識した戦略をとっている。宗教を基盤とする組織を社会サービスや社会運動の担い手と捉えることによってこのようなムスリム同胞団像が可能になっている。

「同胞団のインドネシア支部」ともいわれる福祉正義党を観察してきた見市建は、インドネシア社会をイスラム教を通じて捉える方法の有効性を検討している。インドネシアでは一九九八年政変後にイスラム勢力の政治領域における躍進が見られたものの、民主化が進行する過程でイスラム系政党と非イスラム系政党の相違はあいまいになっており、また、外形的に観察される様子をもとにイスラム教への態度を判断し、その相違から政治社会的亀裂を捉えることはもはや有効でないという。宗教は近代国民国家において体制外勢力としての役割を担うという考え方に対し、自らの信仰を鮮明にして個人的・日常生活の向上をはかる営みが広く見られる社会をどう理解するかがあらためて問われているといえよう。

個人・日常から捉えるアプローチ

「アラブの春」のわかりにくさの一つは、第Ⅰ部で酒井啓子論文が指摘しているように、中心となる特定の指導者や組織を見出すことが難しかったり、「イスラム」「左翼」「世俗」といったイデオロギー分類で運動を一括して理解できない点で、政変の顔が見えないところにある。では、その見えにくい顔にどのようにアプローチするか。

特定の指導者や組織を見出しにくいことの背景として、フェイスブックをはじめとするインターネットを利用した新しい通信コミュニケーション技術の発達が指摘されている。パレスチナ地域を研究してきた錦田愛子は、この地域の人々が従来どのようなコミュニケーションを行ってきたかを踏まえ、その延長上にフェイスブックを位置づけることで新しいメディアの役割を評価しようとする。錦田はフェイスブックが住民訴訟型の要求を示すメディアとして機能していることを紹介しているが、このことは、新しいメディアが為政者と住民をつなぐコミュニケーションの場となっていることを意味する。第Ⅰ部の高原明生

論文でも、インターネット上で為政者と民衆が互いに相手の動向を伺いながらメッセージを発信しあっていることが指摘されている。インターネットを為政者と住民のどちらにとつてより有利なメディアであるかという観点から捉えるのではなく、為政者と住民との新しい対話の場として捉える姿勢をみることができる。見えない顔にアプローチするもう一つの方法は、世論調査などの統計的手法を活用して、新しい観点からデータを作り直すことである。「アラブの春」は中東域内で伝播したが、その現れ方や争点は国ごとに大きく異なっていた。このことは、国境を越えた思想や連帯に注目するアプローチだけでは、この地域の人々の動きを理解できないことを示している。高岡豊は「アラブの春」における中東諸国の運動が実質的には一国単位での首長の追い出しに留まっている現実を示した上で、国境で区切られた領域内で育まれた国ごとの人々の意識に注目し、世論調査をもとに分析を行っている。そこでは、人々が国ごとに固有の課題を認識しているだけでなく、国際政治の動向や中東地域における自国の位置づけを意識している姿が示されている。

(にし・よしみ／京都大学地域研究総合情報センター)